

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370393

研究課題名(和文) 記憶の表象におけるメディア的条件 ドイツ語圏抒情詩の新潮流

研究課題名(英文) Strategies of media and representation - New tendency in german lyric

研究代表者

林 志津江 (HAYASHI, Shizue)

法政大学・国際文化学部・教授

研究者番号：30449300

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：クリングの文芸活動を視覚的・聴覚的知覚のメカニズム、さらにはメディアの特性と言語理解との関わり方という観点から追究するのが本研究の目的であったが、こうした問題性は、詩人による朗読CDや音楽パフォーマンスといった文字テキストの範疇を越える作品をいかに研究対象とし扱うか、形式の刷新に研究がどう対峙しうるのか、文学研究の新たな可能性に関する考察ともなる。クリングの詩作において詩は個別の所与の作品としてではなく、常に詩人の声やアクションを媒介し現前する。詩の受容に際し詩人その人が不可分の存在であるという本研究の知見は、文字テキストの分析という文献学的研究の伝統との対峙でもある。

研究成果の概要(英文)：This research project refers to Thomas Kling's poetry and its theory, that contain not only literal but also oral perception through medias. In works of Thomas Kling, media studies experiences an upswing since 1980s in Germany does a big roll, so the "through medias", the way of perception and understanding of acceptor, concerns the poet very much. Kling describes his own art of poetry reading/action on the stage "Sprachinstallation" to divide from general poetry readings and one of Kling's decisive Achievement as a poet should be shown in his stage and such definition like "Sprachinstallation". As he says, "Sprachinstallation" must be not a reading by optional performer, but the poet himself as the subject of "actio". Kling's Poetry leads us researcher reflections about the traditional way of "Philologie" as a research method; what we regards from the beginning as the research targets and what and how we treat for our research.

研究分野：ドイツ語圏文学

キーワード：声 文字 口頭性 視覚的效果 自己言及性 記憶 「言語インスタレーション」

1. 研究開始当初の背景

詩人トーマス・クリング (Thomas Kling, 1957-2005) の研究は、日本国内のドイツ学研究の現場でまだ始まったばかりである。詩の翻訳は雑誌上で一部発表され (縄田雄二氏による「夜警」Nachtwache の翻訳 [Deli 第2号, 2003年]) 研究書誌としては、日名淳裕氏によるドイツ語研究論文 „Der Ort : gedicht - Über Thomas Klings Gedicht *mühlau*, f - (場所 : 詩 - トーマス・クリングの詩「ミュラウ, f」) (東京大学ドイツ語ドイツ文学研究室編『詩・言語』第75号, 2011年) がもっとも早い段階で成立したもので、日本語による研究書誌としては、本研究代表者も参加した、日本独文学会研究叢書の一冊『文化史・文学史からみたトーマス・クリング』(縄田雄二編、日本独文学会叢書094号, 2013年)があるのみである。クリング研究に関しては、日本国内の研究の現場からの発信例も乏しいばかりでなく、日本外の先行研究資料も日本ではまだ広い周知には及ばない状況にある。

上述の日本独文学会研究叢書「文化史・文学史からみたトーマス・クリング」の基となっているのは、2012年10月に本研究代表者も参加した、日本独文学会秋季研究発表会での同名のシンポジウムである。タイトルにある「文化史・文学史からみた」という箇所は、クリングの作品に、詩作の技法ならびに伝達メディアとしての詩のあり方そのものを主題化するような、強い自己言及性が認められること、さらには現代のドイツ語圏文学が総じてメディア論のような理論研究や思想探求の動向と密接に関連しあう状況の再確認でもある。つまりクリングの作品分析は、それによりドイツ語圏文学研究の一般的な兆候・動向を追うことにも等しく、それだけですでに研究には相応のアクチュアリティが認められるが、クリングが自らの詩作ならびに文芸活動をメディア論の成果と対決しつつ展開していることは、詩作そのものに関する方法・戦略としてのみならず、それ自体がメディアに浸食された現代社会を分析するメディア論となる特徴もあわせ持つ。クリングが作品の発信・受容において戦略的に考えていた言語コミュニケーションのあり方、さらに詩人の作品/詩の形式の多彩さは、間違いなくクリングの意識的なメディア論との接近によって達成された成果ともいえ、その意味で、クリングに関する包括的なメディア論ないし「メディア」をキーワードにしたアプローチは非常に待たれるところであろう。

2. 研究の目的

本研究の目的は、1990年代のドイツ語圏人文学がリードし続けてきた「文化的記憶」ないし「想起の文化」研究を、批判的な記憶表現

としての文学から発展させ、ドイツ文学研究を狭義の文学テキスト研究としてのみならず、学際的に探求・推進する方法とその理論的な考察を追究することにある。

言語伝達能力の(不)可能性や言語テキストというメディアの特性に対する疑義は、理解にたやすいストーリー形成を前提としない抒情詩という形式によって、最も先鋭的に表象されうるとも言える。中でもクリングは、1980~90年代以降にドイツ語圏から発信された、メディア論の理論的射程を自身の詩作へと昇華させながら、一方ではウィーンのエッセイアヴァンギャルドとつながりを持ちつつ、非常に多彩な詩作を行ってきた。クリングを対象に据えることで、文学を美的な形式を持つ伝達メディアのひとつとみなす相対的な視点と、文学・芸術による記憶の批判的表現という前提を維持しつつ、テキスト分析研究の範疇を超えた抒情詩研究の新たな射程を切り開くことができるのではないか。そしてそれは当然ながら、制度として支えられた「抒情詩」研究の伝統へ向けた、アクチュアリティに関する問いでもある。クリングを対象にすることで、抒情詩の研究は単なる抒情詩の研究を超えた広がりを持つことになる。

さらにメディア論への接近を背景に、クリングの作品は一見して非常に実験的な要素に満ちている。そのようなクリングの詩作については、従来の文献学的な文字テキストの分析を自明とする抒情詩解釈によって達成しうるとは思われない。その意味で、クリングが展開した詩作・文芸活動は、従来の文学研究、ドイツ学研究が自明としてきた枠組みの見直しや反省の契機ともなりうる。

その上でクリングが、このほかドイツ語圏の人文科学の現場で興隆をみたメディア論と格闘し続け、その知見を自らの詩作と文芸活動に反映させることにやぶさかではなかったことは、文学研究の硬直化に対する批判的視座をも含む。クリングのメディア論への目配せは、彼の詩作方法の探求のみならず、抒情詩という文芸形式のアクチュアリティそのものの見直しという作業を含んでいるのである。その意味で、クリングの遺した作品と文芸活動は、今後もドイツ語圏における文学ないし思想探求の動向に対し大きな影響力を発揮しうると考えられ、またその影響力は、本来はドイツ語抒情詩という既存の制度の内部でのみ評価されうるものでもない。以上の通り、トーマス・クリングの作品を、他でもないメディア論ないしメディア、知覚という観点から考察することは、ドイツ語抒情詩の動向とアクチュアリティを問うという意味でも重要な意義をもっている。

3. 研究の方法

本研究が対象とするトーマス・クリングの作

品は、日本のドイツ学研究的現場ではいまだ顧みられることが少ない。よって研究に着手する前提として、研究の最新動向情報の意識的な収集がまずは不可欠である。その上で基本的な研究の道筋としては、研究代表者による分析と考察を学会や国際会議、論文の形で発信し、それに対するフィードバックを得たのち、それらを参照しつつ進めるテキストや音源・映像の分析およびならびに考察ということになる。また最新の研究動向が広く周知されていない現場に鑑みるに、国外、とりわけドイツ語圏のドイツ学研究的動向を注視しその情報を、国内外の研究者とさらに共有していくことも、現時点で重要な課題のひとつである。以上の成果は、日本におけるクリング研究の進展と全く無関係ではない。また本研究で依拠するメディア論の知見としては、主に米国のメディア史家ウォルター・オングの考察、とりわけ『声の文化と文字の文化』(Orality and Literacy. The Technologizing of the Word, 1982)の援用を考えている。オングによれば、ヨーロッパでは主に16世紀以降、言語知覚における主体が「声」から「文字」へ、さらに「声」へと推移したという歴史的変遷を経たという。「声」と「文字」はどちらも言語を媒介する伝達メディアであるが、オングをはじめとするメディア論の知見は、西洋近代の誕生が同時に「文字」が「声」を支配する言語状況の成立であったことを示している。クリングは、言語メディアの優位が「声」から「文字」へ移り変わる過渡期の混交状況の中に、非常に大きな人間の心理的・文化的変化のダイナミズムがあったことに注目しており、以上からクリングの関心は、とりわけオングのメディア論的考察との親和性が高いと考えられる。それと同時に、クリングの作品との対峙は、クリングが参照している多くの作家・詩人の作品分析にも見いだすことができる。本件キュでは、クリングが生前、詩人パウル・ツェラン(Paul Celan, 1920-1970)の後継者と目されたことに注目し、本研究者が以前より取り組んできたツェラン作品の新たな研究・分析の試みにも通じる言語伝達のメカニズム分析と叙述方法の分析を通じて、クリングの作品を分析する方法の追究に努めたい。

そして現在、クリングはいわゆる文学研究的範囲においてのみ受容されているわけではなく、現在活躍している詩人や作家たちは、クリングの作品あるいはクリングからの影響について、彼らの作品の中で、あるいはさまざまなメディアを通じて積極的に言及している。本研究では、近年とりわけ活動の幅を広げているドイツ語作家のマルセル・バイアー(Marcel Bayer, 1965-)の2011年以降の抒情詩を取り上げる。これらバイアーの作品は、2014年に『黒鉛』(Graphit, Berlin 2014)として刊行されているが、『トーマス・クリング全詩集』(Thomas Kling Gesammelte

Gedichte, Köln 2006)の編者のひとりでもあるバイアーは、この『黒鉛』の中でとりわけクリングの記憶に触れ、クリングの作品と彼ら詩人同士の交流を主題として取り扱っている。なおこの『黒鉛』は高く評価され、バイアーは本作品を発表した2014年、ドイツにおいて新進気鋭の作家に贈られる「クライスト賞」(Kleist-Preis)を受賞した。さらにこの受賞はバイアー作品の日本での受容を促進することになり、本研究はそのタイミングで、バイアーの作品読解を通じクリング作品の追究を充実させることができた。

一方、ドイツ語圏の研究の現場では、クリング研究がドイツ文学研究において定着する中、研究の強力な発信元として注目に値するのは、詩人が存命中に住んでいたドイツ・ノイス(ノルトライン・ヴェストファーレン州)にある複合芸術施設「ラケーテンシュタツィオン・ホンブローイヒ」(Raketenstation Hombroich)内にある、詩人の自室を元にした「トーマス・クリング・アーカイヴ」(Thomas Kling Archiv)である。過去10余年にわたり、このアーカイヴを中心に行われている、遺稿の発表を含む活発な研究活動は、本研究がもっとも注視すべきところであり、本来のアーカイヴとしての機能としてのみならず、情報源としても積極的に活用したい。さらにこのトーマス・クリング・アーカイヴは、おもに近隣ラインラント地方のボン大学などとも連携しながら、トーマス・クリング研究を強力に牽引している。クリング研究そのものはすでに、ドイツ語圏の大学におけるドイツ学の講座においてもすでに確立した研究分野として認知され、大学の講義や演習などでも扱われている。ドイツ語圏の大学を中心とするクリングに関する研究プロジェクトおよびクリングの作品等を扱う学位論文の動向もまた、クリング研究の動向を知る上で貴重な手がかりである。本研究では、この部分に関してとりわけ、ボン大学哲学部ドイツ文学比較文学講座のケルスティン・シュテュッセル教授(Prof. Frau Kerstin Stüssel)、インゼル・ホンブローイヒ財団トーマス・クリング・アーカイヴのリカルダ・ディック氏(Dr. Richarda Dick)、アーカイヴの主宰者でトーマス・クリングの伴侶であった画家ウテ・ランガンキ氏(Ute Langanky, 1957-)の知見とご協力を賜ることとなった。

4. 研究成果

クリングの詩作・文芸活動を、視覚的・聴覚的知覚のメカニズム、さらにはメディアの特性と言語理解との関わりという観点から追究するのが本研究の目的である。本研究が前提としてまず取り扱わねばならなかったのは、クリングによる「詩」(Gedicht)に関する「高度に複雑な言語体系」(Hochkomplexe Sprachsysteme)という(In: *Itinerer*, p.55)という定義である。「高度に複雑な言語体系」

とは、詩が声 (Stimme) と文字 (Schrift) の相関的な関係が現前するメディアであるという認識に依拠すると考えられる。詩は声であると同時に文字 (文字テキスト) でもあり、この両者は一方が他方に還元されるような関係ではありえない。研究成果は以上の前提・仮説の論証にも相当するものとして、主には以下の2点に集約される。

(1) 声と文字の補完的な関係：クリングの文字 (活字) テキスト

本研究では、クリングが対峙した < 声と文字の補完的な関係 > を考察するのに、まずクリングの文字 (活字) テキストに着目した。検討材料は 1993 年に活字の詩集の形で発表された詩「吸い取り紙。ペイルマーメア」(löschblatt. bijlmermeer, 1993) のテキスト (文字テキスト) である。この詩を収録した詩集『夜。眺め。器具』(nacht.sicht.gerät, 1993) は、それ以前の詩集『味覚増強剤』(geschmacksverstärker, 1989) および『燃料棒』(brennstabm, 1991) の二作とともに、詩人中期の集大成を形成している。

「吸い取り紙。ペイルマーメア」には、クリングの他の文字 (活字) テキストにも散見される、母音弱化の意図的な活字化が確認できる。すなわちドイツ語の動詞の語末にある "e" ないし "en" あるいは音節の意図的な収縮による "e""u""i" 音についてが、意図的に文字テキスト上のつづりの表記として反映されていない。こうしたテキストの特徴について一方で興味深いのは、そうしたつづりの脱落には究極的には他の言語に翻訳できない、言語の意味伝達の次元に反映させることのできないものが含まれており、そうした表記には感覚的に口頭性を感じさせる要素が強いという特徴であろう。しかしこうしたクリングの手法は、文字上に口頭性というコンセプトが強調されるというような話にとどまらない。重要なのは、標準的なドイツ語正書法と異なるつづり字が、スムーズなテキストの黙読、つまり標準ドイツ語の文法体系の内部で定着している一対一の記号内容 (Signifikat) と記号表現 (Signifikant) の組み合わせによる言語の意味の理解に関するメカニズムを改めて意識化させるということだろう。つまり、母音弱化をわざわざ表記に用いることで、文字による読解作業はスムーズではなくなるが、その際に発話する、あるいは発話を意識することでようやく、詩のそれぞれの語は完全に充満させられた語となる。正書法ないしつづり字の思考という営みは、文字と声の整合性を問いなおす営みでもある。このようにクリングの文字テキストにおいては、聴覚的に知覚した言語の文字表記による再現という、文字と声が交差する文字言語の本来の様相が、母音を意図的に脱落させる詩の技法により際立たせられる。そしてこのようなクリングの詩作の術は、

クリングの口承文芸や古代祭式、方言の多用など、口語性への強い関心とも関連づけることができるだろう。クリングの作品テキストは、西洋近代的な書字性 (Schriftlichkeit) 優位の自明性を改めて浮き彫りにさせる。

(2) 形式の拡張：クリングの文芸活動及び詩論の検討

形式の拡張と「言語インスタレーション」の関連、視覚と聴覚の交差
クリングの「口頭性」に対する強い関心と度重なる言及は、いわゆるテキスト記述を通じた形式の範疇を越え、詩人による朗読舞台の方法と形式の模索においても反映されている。本研究は以上の前提とともに、先の検討材料だった < 声と文字の補完的な関係 > と並行し、クリングの文芸活動とともに、そうした文芸活動についての論考を含む詩人の詩論の検討を行った。その際の材料としたのは、主に「ラッティンガー・ホーフ・ツェットペー (3)」(Rattinger Hof, Zettbeh (3), 1989 テキスト成立) のテキストおよび詩人による朗読の録音 (In: Die gebrannte Performance. Lesungen und Gespräche. Ein Hörbuch, 2015) および「ヘリコプターの停まっている森の一区域」(waldstück mit helicopter, 1989 テキスト成立) の朗読舞台映像 (フリー映像) である。研究においては、以上の文芸活動の記録と文字テキストに加え、クリングの詩論的エッセイ『駅路目録』(Itinerer, 1996) の記述をつき合わせ、クリングの詩論に関する批判的検討を試みた。

クリングは『駅路目録』の中で、自身の詩作をいわゆる近代的な文字テキストの形式においてのみならず、"Actio" (活動、朗読、演技) において呈示すべきと述べる。このことは、後に発表した詩の作品集である『遠隔地商業』(Fernhandel, 1999) や『試験発掘』(Sondagen, 2002) を、活字テキストに自分自身の朗読 CD を付けた形式で刊行したことから伺うことができる。クリングが自身の詩作をこうした形式において発表しているのは、先にも触れた、詩が「高度に複雑な」、つまり声と文字の相関的な関係が現前するメディアであることを呈示し標榜するためだと考えて良いだろう。

そしてクリングの朗読舞台 (Lesung-Vortrag/Auftritt) を actio (活動、朗読、演技) の実践とみなすことのできる根拠は何だろうか。クリングは 1970 年代の終わりに詩人としての活動を開始し、79 年から約 1 年間ウィーンに滞在し、1985 年頃から自分の朗読・文芸活動を「言語インスタレーション (Sprachinstallation)」と定義するとともに、詩人としての自らを「演技的な詩人 (historionischer Dichter)」と称するようになる。つまり先に挙げた「ラッティンガー・ホーフ・ツェットペー (3)」や「ヘリコプターの停まっている森の一区域」は、現在私たちがアクセスできる朗読の録音 CD や映像は

全て 1989 年以降に行われたもので、全てクリングの言う「言語インスタレーション」に該当すると考えられる。そしてこのようなクリングの詩作と文芸活動は、いわゆる活字テキストの刊行という活動の範疇を超え出ると同時に、ヨーロッパの伝統的な慣習的な「朗読会」(Lesung)とも一線を画すものとして意図されている。

また詩人が自身の詩の舞台をわざわざ「言語インスタレーション」と銘打ったのは、クリング自身の言によれば、1980 年代にはすっかり人口に膾炙していた「パフォーマンス」(Performanz)という語ないしその概念を呼称とするさまざまな舞台上の催しものと自身の朗読・舞台を区別する意図による。しかしそれに際しては当然、なぜそうした区別が必要だったのか、「言語インスタレーション」の独自性が何なのかという疑問が浮かぶ。

クリングは「言語インスタレーション」を、「言語の諸空間 (Sprach-Räume) を声によって形成 (構成・具体化) し、言語を (書かれた) 文字の声 (Stimme der Schrift) を以て形成する、それが言語インスタレーションだ」と定義する。ここでまずは、「言語の諸空間」と「言語」それぞれの形成が並列させられている点に留意しなくてはならないだろう。言語は所与の実態ではなく、言語になる瞬間を経て言語化される現象である。そしてこのクリングの定義についてだが、「Sprach-Räume」(言語の諸空間)が「声によって形成」とあることから、「声」が聴覚的に知覚される言語現象として、「諸空間」(“Sprach-)Räume“ という複数形が用いられていることから、発話と言語使用の複数性や言語体系の多層さを意図すると考えられる。クリングの作品として「形成」される「言語の諸空間」とは、ありとあらゆる発話の場を内包する言語現象として、さらに声によって生起するものとして構想される。

しかし言語と「言語インスタレーション」は発話だけでは完結しない。先の定義にある「言語を (書かれた) 文字の声から形成する」を、詩人がテキストを読む / 吟ずる (Lesung/ Rezitieren) 行為ととらえれば、ここでまたひとつ非常に興味深い特徴が浮かび上がる。つまりクリングの「言語インスタレーション」という朗読の舞台には、即興的に詩を作って発するような行為は含まれない。さらに「ヘリコプターの停まっている森の一区域」の映像からもわかる通り、クリングは聴衆の眼前で、自身の書いたテキストあるいは刊行した詩集を音読している。この行為は、「読む」(lesen) ことを観客に向けて視覚的に明示するという意味で、非常に重要な仕掛けであり構想である。観客が文字を見て / 読んでその言語を声にしている詩人とその行為を見ているということが、「文字は見られることで声になる」、すなわち「言語インスタレーション」という構想の実践である。

記憶の伝達者・発信者としての詩人

クリングの作品形式は総じて多岐にわたり、一見して非常に実験的な要素に満ちている。例えば、先に言及した二作とほぼ同時期に成立した作品『燃料棒』(brennstabm, 1991) のテキストは、詩集というよりもむしろ写真に文字が沿えられているという印象が強く、文字と視覚的知覚の関係を強く意識させる。『燃料棒』を貫く主題は「メディア」およびメディア論であり、クリングはここで第一次世界大戦と報道、報道と写真の関連というテーマと対峙している。

他方、クリングは『燃料棒』発表の 2 年後に、金管楽器 (トランペット) とティンパニをともなう作曲家トーマス・ヴィッツマン (Thomas Witzmann, 1958) との共作音楽劇『ヴォルケンシュタイン、動員』(wolkenstein. mobilisierung, 1993) を発表するとともに、のちにこの音楽劇用の朗読テキストを、妻で画家のウテ・ランガンキ (Ute Langanky, 1957) が制作した写真やリノカットと組み合わせたアーティスト・ブック (『ヴォルケンシュタイン、動員。ひとつのモノログ』wolkenstein. mobilisierung. ein monolog. 1997) としても発表している。詩の構成要素は、クリングの作品中、視覚と聴覚を縦横に駆け巡ると同時に、文字と写真、声と音 (音楽) のそれぞれが交差する非常に多層的なものとして構想される。自身の存在と業績を記憶にとどめるため、自己の生を後世に伝承するため自己言及的な数々の詩の創作を行ったヴォルケンシュタインの詩作とその工夫の中に、「自ら発信する詩人」の萌芽を見たと考えられるが、この『ヴォルケンシュタイン、動員』同様、本研究が検討材料として取り上げる「ラッティンガー・ホーフ・ツェットペー (3)」や「ヘリコプターの停まっている森の一区域」は、どれもジャズ・ドラマー・パーカッショニストで作曲家のフランク・ケルゲス (Frank Köllges, 1952-2012) のドラムスとの共演である。ヴィッツマンとの音楽劇やドラマーとの共演という音楽との合体形式は、クリングの詩作と形式の主要な特徴である。つまり「言語インスタレーション」ないし「言語の諸空間」に入り込む音楽の要素とは、中世から近世にかけて西洋音楽、とりわけドイツ語圏の音楽が言語との接近を深め高度な形式を整えていく歴史的変遷を連想させる。また音楽は、上演を伴う発信でなければ音楽を経験することができないという意味で、黙読の可能な文字メディア経験とは別の特性を持つメディアとみなしうるが、音楽を伴う朗読の舞台上演は、「記憶の発信者」としての詩人というコンセプトをより強力に打ち出すための重要な装置であるとともに、「見られることで声になる」言語の様相の片鱗を示している。

またクリングの actio の実践たる「言語インスタレーション」は、詩の発信者たる詩人が、文字で記されたテキストを舞台上で朗読す

るアクションが実施される瞬間ごとに生起するものとして、包括的に構想されている。こうした形式の追究は、クリングがとりわけダダやウィーン派の活動を強く意識しつつ確立してきたものと言えるだろう。ダダやウィーン派は、言語の声・音の側面に理解を示すことで、結果として、西洋抒情詩における近代以前の状況、書き言葉の優位が確立する以前の時代の状況に目配せすることができたが、クリングの詩は、それをも目指しつつ、と同時に非常に近代的な抒情詩の要請にも果敢に挑戦しようとしているとも考えられる。クリングはかつて「詩のプロフェッショナルな詩の公演に求められる4つの望み」(*Vier Wünsche für den professionellen Vortrag des Gedichts*. In: *Botenstoffe*, Köln, 2015) と題する文章で、詩が舞台を通じて発信されるための必要条件を明らかにしているが、ここでクリングは、聴衆が言語の意味の「理解」に信頼をおくこと、朗読上演の場面で「解釈すること」を拒絶し、聴衆が言語の意味をメッセージとして解釈し受け取るのではなく、舞台に進行している文字から声へ、声から言語へ言語という流れを追うことを求めている。そしてそうした一連の流れは、徹底的に個人の記憶を呈示する媒体としての詩になる。この点は、詩が個別の所与の作品としてではなく、常に詩人の朗読行為とその声を媒介して初めて現前するという、クリングの詩作において貫かれる原理原則ともつながっている。ダダやウィーン派は、言語の声・音の側面に理解を示すことで、西洋抒情詩における近代以前の状況、書き言葉の優位が確立する以前の時代の状況に目配せすることができたが、クリングの詩はそれをも目指しつつ、「解釈」を拒絶するという明確な志向性を持つ。詩の上演をメタファーの多義性や模倣的な詩の克服という課題と関連づけるならば、クリングはダダやウィーン派から多くのことを吸収しつつ、それを乗り越えようとしたのだとみなすこともできるだろう。それと同時に、以上のことが示すのは、詩の受容において詩人その人が不可分の存在であるという先の構想が、文字テキストの分析という文献学的研究の伝統との対峙を余儀なくさせるという点だ。本研究における当該問題性の取り扱い、文字テキストの範疇を越える作品をいかに研究対象とし扱うか、形式の刷新に研究がどう対峙しうるのかという、文学研究の新たな方法と可能性に関する考察に他ならない。本研究は、抒情詩の形式の斬新さが研究方法の見直しとも分かち難く結びついていることを常に意識しながらの作業であったと言える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

林志津江「抵抗あるいは不均質なドイツ語 ツェランのマドリッド、ウィーン、そしてパリ」高橋輝暁先生停年退職記念論集 1 日独比較文化論考 ASPEKT 別巻 1 (頁 291 ~ 318)、2014 年、査読無。

〔学会発表〕(計 3 件)

林志津江：朗読・アクション・テキスト トーマス・クリングの詩作における伝達のストラテジー

2016 年度 日本独文学会秋季研究発表会 (口頭発表：文学 III)

関西大学千里キャンパス (大阪府吹田市) 2016 年 10 月 21 日 (土)

林志津江：記憶を回帰させる詩人の声 / 身体 トーマス・クリングにおける朗読とそのパフォーマンス性

2015 年度 日本独文学会秋季研究発表会 (口頭発表：文学 II)

鹿児島大学郡元キャンパス (鹿児島県鹿児島市) 2015 年 10 月 4 日 (日)

林志津江：テキスト内部に圧縮される声 トーマス・クリングの詩作にみられるメディア論的視座

2014 年度 日本独文学会秋季研究発表会 (口頭発表：文学 III)

京都府立大学下鴨キャンパス (京都府京都市) 2014 年 10 月 12 日 (日)

〔図書〕(計 2 件)

川島建太郎、津崎正行、林志津江：ヨッヘン・ヘーリッシュ著『メディアの歴史 ビッグバンからインターネットまで』(法政大学出版社、2017 年 2 月、81-236 頁)(翻訳)

林志津江：マルセル・バイアー「ドン・コズミック」翻訳および解題(縄田雄二編「マルセル・バイアー『黒鉛』からの抜粋抄訳集、2016 年 3 月 11 日東京ドイツ文化センターにおける著者朗読者のために」東京ドイツ文化センター、2016 年 3 月、頁 70-85)(翻訳及び解題)

〔産業財産権〕

なし

〔その他〕

林志津江：図書新聞 2016 年 3 月 26 日号「アクチュアルなツェラン論にしてキーファー論 - 関口裕昭『翼ある夜 ツェランとキーファー』書評」(書評)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

林志津江 (HAYASHI, Shizue)
法政大学・国際文化学部・教授
研究者番号：30449300